

## 〈書 評〉

### 井上正吾編集 精神科作業療法の理論と実際 ―現状と反省―

精神科医療において、その医療給付が皆無であるのにもかかわらず、多くの病院でなんらかの「精神科作業療法」が行なわれ、その治療効果があげられていることは無視できない。本書はこのような視点からいうと、長年にわたって、三重県立高茶屋病院を主とし、この種の治療を病者のために行なっている各精神病院の医師、作業療法士（OT）、精神科ケース・ワーカーの臨床経験の集大成ともいえるであろう。どのような患者がこの治療法を必要とし、またどのようなこの種の治療法が望ましいかなどは、それこそ試行錯誤的段階にまだ低迷しつつあるのであるから、その理論と実際のギャップが、現場の臨床において、いかに努力され、工夫され、そして試行錯誤の過程のうちで望ましい「作業療法」とはどういうものであるか、という「現状と反省」が副題としてつけられている理由もわかる。

しかし、ここであらためて考えてみなくてはならぬことは、すくなくとも「療法」という名をつける以上、どうしてもその効果が問題とな

ることを避けてとおることはできない点である。本書では、各論的事項として、いわゆる「精神科作業療法」と熱心にとりくまれている専門家がこの点に応える論述を行なっている。そして、これらの論述をくわしく読んでみると、どのような試みであれ医師（あるいはセラピスト、作業療法士）と患者の心のふれ合いが原点でなければならないということが納得される。ごく当り前のようなことだが、かつての作業療法がこの原点をはなれて、あたかも企業内職員の能率昂進が精神障害者の社会復帰にいたる過程にそのまま持ち込まれていたことを具体的な記述として、現場で苦勞されている各執筆者の文脈のなかに感じとることができる。また、その反省の根拠に立って、具体的な作業療法（たとえば印刷、レース編み、農作業、養豚など）が述べられているところにも、「患者の立場にたつての作業療法」という治療的なアプローチが現実的に紹介されている。さらに、病院外の外勤療法や、院内のデイ・ケアなどにも、その方面での専門家

の具象化された経験が盛られている。そして最後に、作業療法の精神生理学的な実証知見が加えられている。たんに「動くからよい」というだけではない。この「療法」の根拠が提示されている新しい発展といってよい。おそらく、この種の編著を公刊することはなみたいていのことではなかったと想像される。それだけに惜しいのは、なお昔流の「精神科作業療法」という題名のつけられていることである。むしろ精神科の療法がたんに精神療法・薬物療法・生活指導にかぎらず、医学的にこれらが総合された形での療法が必須であることをふまえた本書の特徴は、内容的に題名をはるかに凌いでいるといってよいであろう。書名にこだわらず、精神科医のみならず、PSWを始め、OT など、現実にはその責務を負っている方々に、座右に備えておいて、事あるごとにひもといてもらいたい本であると思う。

（東大分院神経科医長 平井富雄）  
（A 5, 頁 388, 図 49, 〒 3,400, 〒 170）  
医学書院刊